Sec.1 「なぜ、プレゼンカップを？」～大会創設の思い～

東京都立光明学園　統括校長
前全国特別支援学校長肢体不自由教育校長会長
田村　康二朗

1　企画の発端

プレゼンカップの企画の発端は、コロナ禍を想像もしていなかった平成30年（2018年）春、全国特別支援学校肢体不自由教育校長会（略称：全肢長会）役員会の場で、「全国規模や都道府県単位の障害者スポーツ大会は従来からありますが、高校野球のように同じ分野で志ある全国の高校生が競い合い、優勝を目指して切磋琢磨する場がこの世界にもあれば、日本一や準優勝、地区大会優勝等の栄誉を各地の生徒に毎年贈ることができるのではないでしょうか」、さらに「実現できれば一般の高校生や大学生が履歴書の賞欄にインターハイ出場、県大会ベスト8進出等と堂々と記載して、進学・就労挑戦時の書類選考や面接の場で、これまで積み重ねてきた努力の成果をPRしているチャンスが、肢体校生にも得られることにも繋がります」と私が提案したところ、全肢長会役員の皆さんが大きく頷いてくださり、そこから実現に向けて一気に動き出しました。

ところでなぜ、「高校野球型のスポーツ大会」に類する機会がこれまでの肢体校には全くなかったのでしょうか。それが困難だった理由は、平成28年（2016年）のオリンピック・パラリンピックリオ大会の年に全肢長会主導で立ち上げた、各地の肢体校生徒チームが挑戦できるスポーツ大会である「ボッチャ甲子園」を運営した経験からよくわかりました。

2　会場参集型イベント開催継続の難しさ

現地からの大会開催地への移動手段や介助者確保、交通至便な東京近郊が大会会場となった場合には、北海道や沖縄などの遠隔地からの出場チームについては、前泊先としてバリアフリー型宿泊施設の確保が必須となります。当然、到着ターミナルから宿泊場所までの移動手段、宿泊施設から会場までの福祉車両の手配、運営スタッフや審判員確保等の調整、会場確保も含めた諸々の費用を賄う大会運営資金が必要です。実際のところ、全肢長会役員と開催地の教員ボランティアが、本務の合間を縫って準備・運営を毎年持続可能としていくことの難しさを痛感しました。さらにその費用負担を出場者に求めれば、その高額さから出場者が集まらないかもしれません（全肢長会では、遠隔地からの参加チームに対する交通費補助を行うようにしましたが、自主財源をもたない主催団体ではその支援も数年が限界でした）。

幸いなことに軌道に乗ってきたので、「ボッチャ選抜甲子園」は、3回目から完全に民間団体主催に移行することができ、全肢長会の手を離れた今も、肢体校生徒が挑戦できるスポーツの機会として定着しています。

3　言語・文化面の全国大会を

その一方で、スポーツ以外の面でも高等部生の能力とその意欲を競える場が必要ではないかとの思いも募りました。特別支援の仲間である視覚障害校では伝統の「全国弁論大会」を、聴覚障害校では「全国陸上大会」「全国卓球大会」の2種のスポーツ大会を自ら行っているそうです。こうした先例をヒントに肢体不自由の特性を生かした競い合える持続可能な大会のコンセプトを練っていきました。コンセプトを確立していくプロセスでは、㈱ミライロの垣内俊哉社長とのご縁がポイントとなりました。日本肢体不自由児協会創立75周年式典の場で記念講演された垣内社長を頼ってご相談にうかがったところ、大いに賛同してくださり、垣内社長が提唱されている「障害を価値に＝バリアバリュー」の視点を与えてくださいました。さらに、その後の大会企画にも会社を挙げて協力いただいています。

プレゼンカップのコンセプト

Ⅰ　高校野球（甲子園大会）にも通じる全国肢体校高等部生が競い合える場の創造
　⇩履歴書に記載できる栄誉への挑戦機会の提供

Ⅱ　スポーツ分野とは異なる内容であり、言語活動を含んだ「個性と能力」を生かして、その努力が発揮できる場の創造

Ⅲ　オリンピック・パラリンピック東京大会開催を好機とした共生社会の一層の充実に向けて、肢体不自由校高等部生徒だからこその視点と意見に価値を生み出す場の創造

このコンセプトを基に、「全国肢体不自由特別支援学校高等部プレゼンカップ全国大会ミラコン2018」を開催することを全国に発しました。参加者も運営者側も大きな負担とならず、意義深い内容となるようにないようにと熟慮し、肢体校やその生徒の特性をふまえて、以下の運営方式としました。

プレゼンカップの運営方式の特徴

❶学校や家庭・地域での生活体験を基に基づく共生社会充実に向けた 建設的提言

❷生徒個々に即した 表現方法の自由選択（動画やソフト、機器利用は自由）

❸5分間以内の提言映像データ を収めたDVDを郵送するエントリー方式（郵送は学校によって異なる情報セキュリティ基準によるトラブルを回避する手段）

❹全国7ブロック制の地区大会 は、地区校長会長主導による運営方式（審査会組織で4観点：表現力・説得力・独創性・熱意の審査に基づき地区優勝等贈呈）

❺各地区から 優勝作品DVDを全国大会に郵送するエントリー方式

❻全国大会の運営は、文部科学省をはじ

め、全国肢体不自由特別支援学校ＰＴＡ連合会、日本肢体不自由児協会、全国特別支援学校肢体不自由教育教頭会等の［協力団体の後援］及び協賛企業による運営・技術サポートによる［支援チーム方式］

❼７サテライト会場（出場者校）と大会特設会場を結ぶ［８会場オンライン中継方式］

❽全国最優秀賞、準優勝、第３位及び各賞を贈呈する［即時審査・発表・表彰方式］

（審査会は、各協力団体の代表者、協賛企業役員、聴衆代表で構成）

❾大会出場者の学びの機会として［質疑応答・助言・指導（講演）を含む公開授業方式］

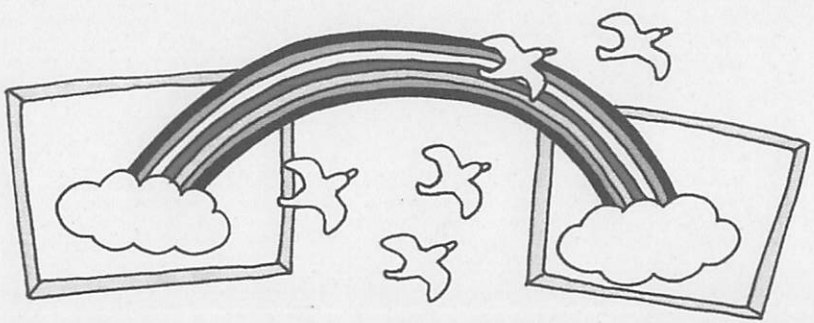
❿［肢体不自由教育を広く社会に発信］するためにプレスリリースで報道各社へ事前告知

４　さらなる発展を願って

学校教育では、知・徳・体の各面をバランス良く伸長させていくことを大切にしています。挑戦する生徒は、社会をより良くしたい「徳」の気持ちを、自分の「体」のもてる機能を理解したうえで、必要な支援機器やソフトを駆使して十分に真意が伝えられるように「知」の発揮を期待しています。

人の心に響くプレゼンとするには、まず、日常の生活や地域社会への鋭い観察眼による解消すべき困難点の発見が第１段階です。そのうえで自分を見つめ直して「叶えたい事」を明確にすることが第２段階となります。次に、プレゼン企画・シナリオ作成・表現の工夫と機器の活用などを練っていく第３段階となります。この思考・実行のプロセスが高等部生を一回り大きく成長させます。

初回のプレゼンカップで社会に提言を発した若者たちは、すでに成人し、社会を牽引する一員として活躍し始めています。これからも本大会の経験を生かして、共生社会の充実をそれぞれの場で進めていかれることでしょう。私たち全肢長会は、今後も学びの機会である「社会への提言の場」を大事に育てていきます。



過去４回の変遷

大会名	開催日	全国大会会場	優勝者在籍校（出場校・作品数）	備　考
ミラコン２０１８	平成31年２月５日	東京都立志村学園特設会場	石川県立いしかわ特別支援学校（36校　86作品）	志村学園の諏訪校長が実行委員長として初開催マスコミ多数の取材があり、記事やニュースに
ミラコン２０１９	令和元年12月18日	東京都立志村学園特設会場	広島県立広島特別支援学校（44校　88作品）	進路挑戦時の履歴書に記載できるようにするために開催時期を12月に繰上げ
ミラコン２０２０	令和２年12月16日	東京都立光明学園特設会場	福岡県立直方特別支援学校（40校　105作品）	文部科学大臣賞を創設し、最優秀作品に初贈呈最多105作品がエントリー
ミラコン２０２１	令和３年12月16日	東京都立光明学園特設会場	鹿児島県立鹿児島養護学校（38校　87作品）	文部科学大臣賞（第2回目）の贈呈九州ブロックからの出場校が2連覇